

日本語個人教授プログラムの目的と実践

湯 浅 悦 代*

キーワード: 個人教授, カリキュラムデザイン

要 旨

近年日本語のプログラムにはビジネス, エンジニアリングなど日本語以外の専攻を持った学生及び社会人, また留学などを通して様々な日本に関する経験を持った学生があふれている。

1998年の秋より, オハイオ州立大学東アジア言語文学科では, 日本語個人教授プログラムが開始された。Dale Lange の論文 “Individuation of Instruction” (1972) でも主張されているように, 外国語教育において学習者一人一人のニーズを中心に据えた指導を行うことの重要性はどんなに強調しても強調し過ぎることはなく, Strasheim (1972) でも外国語教育における個人教授法の有効性が指摘されている。日本語個人教授プログラムには以下のような利点が考えられる: 1) 日本語を学習する新しい機会を提供する, 2) 学習者がそれぞれにあった進度で学習を進められる, 3) 学習者の多様化するニーズに対応する, 4) 学習者が自然な雰囲気の中で日本語のコミュニケーションの実践的な訓練を持つことができる。

本稿では, オハイオ州立大学における日本語個人教授プログラムの概要, その目的, またその注意点及び問題点を論じる。

1. はじめに

オハイオ州立大学東アジア言語文学科では, 1998年の秋より個人教授法による日本語の授業を行っている。Dale Lange の論文 “Individuation of Instruction” (1972) でも主張されているように, 外国語教育において学習者一人一人のニーズを中心に据えた指導を行うことの重要性は, どんなに強調しても強調し過ぎることはなく, Strasheim (1972) においても, 個人教授法が学習者中心の外国語教授法としていかに効果的であるかが述べられている。

本稿では, 日本語個人教授プログラムの目的・利点をまず初めに示し, 実際例を見た後で, プログラムを実際に開始し運営していくための注意点及び問題点の考察を行う。

* YUASA Etsuyo: オハイオ州立大学東アジア言語文学科準教授。

2. 背 景

オハイオ州立大学における外国語個人教授プログラムの歴史は長く、National Endowment for the Humanities からの助成金をもとに 1976 年に最初の外国語個人教授プログラムが始められた。2005 年現在では、日本語の他に、アラビア語、中国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語において個人教授法による語学の授業が行われている。外国語個人教授プログラムの最大の目標は、多様化する学生のニーズに答えることである。(そして、学生のニーズに答えた教育を行うことで、学生数を増やすことでもある。) 例えば、従来のグループ形式の授業は、ほとんどの場合、決まった学期に決まったコースが決まった時間に開講されてきた。結果的に、決まった学期でないと受けないコースは受けられないことになるし、語学の授業は講義の授業に比べて授業数が多いことが多いが、スケジュール的に問題のある学生は、受けたくてもその語学の授業を断念しなければいけないことにもなる。また、日本へ行ったことがあったり、他のプログラム(高校など)で日本語を勉強したことのある学生が増えている今日、他の学生とは違う特殊な指導を必要とする学生も増えている。外国語個人教授プログラムは、この多様化する学生のニーズに答えることを目指している。

オハイオ州立大学東アジア言語文学科では現在中国語、日本語、韓国語を教えている。中国語はレベル 1 からレベル 5 まであり、通常のグループ形式の授業、グループ形式で進度の早い集中講座の他に、個人教授での授業が長年行われてきた¹。日本語もレベル 1 からレベル 5 までがあり、通常のグループ形式の授業、グループ形式の集中講座は 30 年以上の歴史を持つ。個人教授の授業は、1980 年代後半から 1990 年代前半に一度開始されたものの、予算の削減で一度断念しなければならなくなった。しかし、1998 年に国際交流基金の助成金を受け、日本語個人教授プログラムは日本語プログラムのグループ授業、集中講座との 3 本柱の 1 つとして、再出発を果たした。1998 年の秋学期にまず個人教授の日本語 101 (レベル 1 の最初のコース)が再開され、続く冬、春学期、翌年の秋学期に個人教授の日本語 102, 103, 104 のコースが毎学期足されていった。現在は日本語 101 から 104 (レベル 2 の最初のコース)までが個人教授プログラムで毎学期開講されており、101 から 104 までこのプログラムで終わると、大学が規定している外国語必修科目を終わらせることができる²。現在この初級日本語個人教授プログラムには毎学期 70 名程の学生がお

¹ 韓国語はレベル 1 から 3 までであるが、個人教授のコースは開講されていない。

² 初級日本語個人教授のコースを 101 から 104 までと限ったのは、大学の外国語の必修科目が 104 までであることが第一の理由である。日本語専攻以外の学生は、他の専攻の必修科目をとらねばならず、スケジュール的に不都合が生じることが多いが、そのような学生も日本語がとれるように、個人教授のコースが日本語の 104 まで開講されているのである。日本語専攻の学生は、日本語のレベル 3 まで履修しなければならない。よって、個人教授プログラムの、日本語専攻の学生、日本語以外の専攻の学生でも 104 より上の日本語の授業を受けたいものは、104 のあとグループ形式のコースなどに移らなければならない。(グループ形式、個人教授などの形態上の違いをのぞいては、当校の日本語プログラムのコースは同じ教科書などを使って行われるので、グループ形式のコースや個人教授プログラムの間での移動は常に可能である。)

表1 オハイオ州立大学日本語プログラムの概要及び個人教授プログラムの位置付け

	グループ形式	集中講座	個人教授
レベル1	101 (秋) 102 (冬) 103 (春)	101~103 (夏)	101~103 (每学期: 秋, 冬, 春, 夏)
レベル2	104 (秋) 205 (冬) 206 (春)	104~206 (夏)	104 (每学期: 秋, 冬, 春, 夏)
レベル3	307 (秋) 308 (冬) 309 (春)		
レベル4	610 (秋) 611 (冬) 612 (春)	610~612 (夏)	
レベル5			710 (秋) 711 (冬) 712 (春)

り、それを4~5名のインストラクターが教えている。上の表は、オハイオ州立大学における日本語のプログラムの概要と、日本語個人教授プログラムの位置付けをまとめたものである^{3, 4}。

本稿では、この初級日本語個人教授プログラム(101~104)について考察する。

3. オハイオ州立大学、初級日本語個人教授プログラム

グループ形式のコースや集中講座との一番の違いは、個人教授プログラムのコースでは、学習者は他の学習者と一緒にセッションを行うことがなく、教師と学習者が常に1対1で、1回15分のセッションを行うという点である。学習者が教師と1対1でセッションを行えるということから、学習者はコースや進度を各々のスケジュールやニーズによって柔軟に決定することができることになる。

学期の初めからの個人教授プログラムの活動を述べると、まず学習者は日本語の101から104の中から自分がとるべきコースを好きな単位数だけ登録するところから始まる。通常のグループ

³ 初級日本語個人教授プログラムでの学生の反応、及び上級日本語を勉強している学生からの要望により、2001年より、レベル5(日本語710~712)でも一部の授業を個人教授のセッションに切り替えた。レベルによって、多様化したニーズへの個人教授プログラムの対応の仕方は様々であり、オハイオ州立大学でも初級日本語個人教授プログラムと上級日本語個人教授プログラムではその形態も内容も異なる。本稿は初級日本語個人教授プログラムに焦点をあてているので、以下では上級日本語個人教授プログラムについては詳しく述べないが、上級日本語個人教授プログラムも学生の反応がよく2004年時点で2000年以前にグループ形式で授業を行っていたときに比べて、学生数が2倍から3倍となっている。

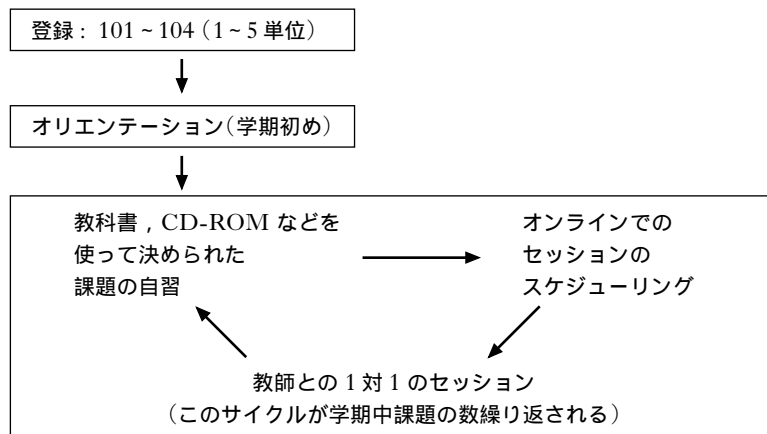
⁴ 集中講座は夏の集中講座のほかに、1年(秋, 冬, 春)でレベル2と3を終えるものもある。

形式のコースでは毎学期決められたコース(1 コース 5 単位)のみが開講されるが、個人教授プログラムでは、いつでも 101 から 104 までのコースが履修できるほか、もし 1 学期で 1 単位だけ登録したければ、それも可能であるし、1 学期 1 コース(5 単位)以上を履修することも可能である。

学期の初めに、個人教授プログラムのコースに登録した学習者はすべてオリエンテーションに参加する。オリエンテーションが、学習者が他の学習者とともに集まる最初で最後の機会である。1 時間から 1 時間 30 分ほどのオリエンテーションで、学習者は教材、勉強の仕方、プログラムの仕組み・規則などの情報、及び単位を取るための課題のリストを渡される。

このオリエンテーション以降は、学習者が個々課題を自習し、自習がすんだ課題について最終チェックを受けるために教師と 1 回 15 分のセッションを持つ。1 単位の課題は平均 7 つで、課題 1 つの自習が終わる度に学生はセッションを 1 回持たなければならない。だいたい 70 名ほどの学生が毎学期 101 ~ 104 までの個人教授のプログラムに在籍しているので、学生は 1 週間に 5 セッションまでしかセッションをスケジュールできないことになっており、毎週オンラインで次の週のセッションのスケジュールを組む。「自習 → セッションのスケジュールリング → セッション」のサイクルは 1 学期(10 週)の間、課題数分だけ繰り返される。もしその学習者がその学期に 5 単位登録したのであれば、1 単位 7 課題であるから、1 学期(10 週)で 1 回 15 分のセッションをほぼ 35 回持たなければならないことになる。次の表は、個人教授プログラムの活動をおおまかにまとめたものである。

表 2 日本語個人教授プログラムの活動



学習者はセッションに来るまでに課題を各々勉強し、かつ実際に使えるレベルまで練習してることが期待されている。そして、実際のセッションではその課題に基づいて口頭試験のようなものを行う。セッションはその学習者がわかる範囲内の日本語のみで行われ、教師と学習者は課題に基づいて日本でよくあるような会話のシミュレーションを行う。セッションが終わるたび、

学生はそのセッションでの評価を受ける(課題の評価の平均がその学期の成績となる)。必要に応じて、教師は学習者の間違いを指摘・修正したり、アドバイスをしたりし、学習者は、勉強が十分でなかったり適切でなかった場合、教師のアドバイスをもとにその課題ができるようになるまで同じ課題の自習・セッションを繰り返さなければならない。与えられた課題が十分にこなされた段階でのみ、学習者は次の課題に進むことになる。

セクション 6. で述べるように個人教授プログラムではすべての教案を前もって準備しておくので、教師のほとんどの仕事は学習者とセッションを持つことである。本校の個人教授プログラムでは教師はみな週に 10 時間から 12 時間学習者とのセッションのために時間を設ける。プログラム全体では毎週月曜日から金曜日まで毎日 7 時間から 9 時間、土曜日は 3 時間から 4 時間、セッションのための時間を設けている。

4. 日本語個人教授プログラムの目的

上に述べたような日本語個人教授プログラムは、以下のような目的を果たすことが念頭に置かれている。

4-1. 日本語を学ぶ機会を提供する

前述したように、語学のコースはほかのタイプのコースに比べて授業の回数が多く、オハイオ州立大学ではグループ形式の日本語の 1 年目のコースは週に 7 回授業がある(2 回の文法などについての講義と 5 回の会話の授業)。グループ形式の 101 には 120 人ほどの学生がいるために朝 7 時半から昼 12 時半まで 5 から 7 の別々のセクションをもうけているが、それでも仕事をしている学生、他の授業のスケジュールとうまく日本語の授業のスケジュールが合わない学生などは、どんなに日本語を勉強したいと思っても、日本語を学ぶことができないという問題が生じる。個人教授プログラムでは月曜から金曜まで朝 9 時頃から夕方 6 時または 7 時頃まで、また土曜は 10 時から 2 時頃までセッションのための時間を設けており、たとえフルタイムで仕事をしている学生でも、日本語の勉強を開始かつ継続することができるようになっている。

また、秋、冬、春、夏学期と每学期 101 から 104 までを開講しているため、1 年中いつでも日本語を始めることができ、例え何かの都合で 1 学期ほど日本語を休むことになっても、次の授業をとるのに 1 年待たなければいけないというようなこともない。

4-2. 各々の学習者のペースにあった進度

グループ形式のコースと違い、個人教授プログラムの学習者は 1 対 1 で教師とセッションを持つため、学習者は自分にあったペースで学習できる。個人教授プログラムのコースは 1 単位から

登録することが可能で(グループ形式のコースは1コース5単位で、1学期にそれ以上、それ以下の単位をとることはできない)、5単位登録すれば普通のコースと同じ進度で進むこととなるが、1単位しか登録しなければ、その分課題も少ない訳で、時間的に余裕を持って学習することができる。もしその学習者がアジア系などで漢字などを既に知っているなど日本語を勉強するにあたって有利なバックグラウンドを持っていたり、普通以上に勉強する意思があれば、1学期に5単位以上を登録して、グループ形式のコースなどより早く進むこともある。

度々その学習者にあった進度とその授業の進度が合わないことが、グループ形式のコースで学習者がコースを途中でやめてしまう大きな原因となっているが、学習者が各々にあったペースで学習をすることができる環境を提供することは個人教授プログラムの大きな目的の1つとなる。

また学習者が自分にあったペースを保つことができるというだけでなく、もしその学習者のある課題の習得度が十分でないときは、教師はその学習者に同じ課題を再び学習することを指導することができる。学習者がわからないところが残ったまま先に進むようなことがないのである。

4-3. 様々な学習者のニーズに十分に答える

今日、日本語の学習者の中にも高校で日本語を勉強したことのある者、日本へ行ったことのある者など、いろいろなバックグラウンドを持った学習者がいる。時に、これらの学習者はスピーキング、リーディングなどの違うスキルの習得が同じようにできていないことがあり、会話はできるが書けない、漢字は知っているがきちんと話すことができない、などという問題があることがある。これら特殊なバックグラウンドを持った学習者は、グループ形式のコースなどで適切なレベルを探すのが大変難しく、またどこかのグループ形式のコースに入ったとしても、自分がもう知っていることが授業の焦点である場合などは退屈して、クラス全体の雰囲気悪くするなどの問題が生じることもある。個人教授プログラムでは、すべてのセッションが1対1で行われるため、ある程度までは各々の学習者のニーズに沿って課題を変えたり、特にその学習者が学習を必要としているスキルに課題を集中させたりすることができる。

グループ授業が48分であるのに対して、個人教授プログラムの1回のセッションが15分というのは短いと思われるかもしれない。しかし、グループ授業ではたいてい48分を15人から20人ほどの学生の指導に使う訳で、1人の学生の指導に15分使われることはない。また、15分の間、1つの課題に関してしっかりその学習者の習得の度合いをみることができるので、個人教授プログラムはよりこまやかな学習者の指導が行える。

4-4. 自然な日本語のコミュニケーション

すべての個人教授プログラムのセッションは1対1で行われ、課題にある語彙や文法をもとに学習者は教師とセッション中実際の会話のシミュレーションを行う。これはおそらく大抵の学習

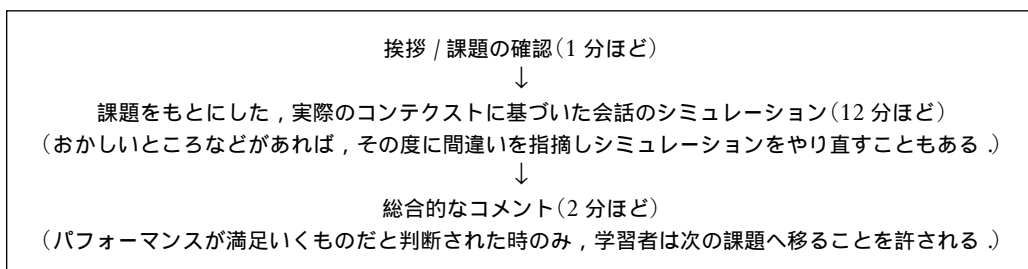
者が将来日本語の話者とコミュニケーションをはかるときの自然な会話の状態に限りなく近い形態であると思われる。(グループ形式のクラスで行われているように、たくさんの人の前で日本語を話すということは、実際のコミュニケーションでは限られているだろう。)より自然な雰囲気の中で、学んだことを使って教師とコミュニケーションのシミュレーションを行うというのは、学習者にとって有益な実践的訓練となるとと思われる。

更に、グループ形式の授業では、日本語だけで話すことになっていても、アメリカの大学の授業の文化がどうしても残ってしまう。例えば、日本では敬語などを使うとき、肘をついたり、足を組んだまま話すようなことはしない。しかし、それらの行動はアメリカの大学の文化では当たり前であり、いくら日本語を習得するということは言語活動そのものを習得することだと教えても、クラスのほとんどが当たり前と思っているアメリカの文化の規範を日本語の授業から完全に排除するのは難しい。個人教授プログラムでは学習者一人一人がセッション中は日本語のみを話すことになっている教師と1対1でセッションを行うため、グループ授業などに比べてもっと日本語・日本文化の規範を当たり前のこととして、学生に日本語で自分を表現するということを体験させることができる。

次のセッションでは、実際のセッションの具体例を通して、実際にどのように個人教授が行われているかを見る。

5. 個人セッション具体例

1回15分のセッションはすべて日本語で行われ、基本的な流れは次のようになることが多い。



まず、1対1でセッションをする部屋へは、学習者は日本語でその時間にあった挨拶をしながら入ってくる。セッションの教師と話す時は、日本語で、また日本文化に則って行動するようにオリエンテーションで伝えてあり、学習者はお辞儀をしながら、「おはようございます」「こんばんは、失礼します」などと言いながら、部屋へ入ってくることになっている。次に、実際のシミュレーションを行う前に、どの課題を準備してきたのかを確認する。セッションをオンラインでスケジュールするとき、どの課題のシミュレーションを行うのかは連絡することになっているが、

101 から 104 までで 150 ほど課題があるので、学生が準備してきた課題とセッションで行うシミュレーションとの間にギャップが生じないようにするためである。また、それぞれの学生にはファイルがあって、どの課題をどのように行ったか記録をするので、日付なども書き込む。

これらを 1 分程で確認した後、実際の課題に基づいた会話のシミュレーションが始まる。表 3、4 は実際の教案例である。

表 3、表 4 の一段目にあるのは、学生が教科書とテープ、コンピューターなどを使って勉強してくるはずの、課題のリストである。このような細かく決まった課題のリストはオリエンテーションのときに渡されている。準備の際には、文法、文化的な理解を教科書で行い、テープ、コンピューターなどでターゲットとなっている表現などを何度も聞き、また実際のコンテキストを思い浮かべながら発音し、ドリルなどを使って適切なコンテキストで使えるようになるまで勉強してくることになっている。もちろん、ターゲットとなっている表現は覚えておかなければいけない。3 つに分かれた次の段には、実際にシミュレーションをするための教師の発話(2 列目)、課題に基づいて学習者に期待されている発話(3 列目)、そしてそれらをいろいろなコンテキスト

表 3 課題 #1 の教案例

課題 # 1		
Greetings and Useful Phrases (Japanese: The Spoken Language, p. 24)		
	1. おはよう / おはようございます	
	2. こんにちは	
	3. こんばんは	
	4. おやすみなさい	
	5. さようなら	
コンテキスト	インストラクターの発話	学生の発話
絵 #1: オフィスの絵, 時計(朝 7 時), インストラクター = your boss	: あ, おはよう .	: <u>おはようございます</u> .
絵 #2: インストラクター = your assistant	: おはようございます .	: <u>おはよう</u> .
絵 #3: 大学の絵, 時計(昼 1 時), インストラクター = your professor	(学生からも挨拶できるように, 挨拶を始めるようにジェスチャー .) : あ, こんにちは	: <u>こんにちは</u> . . .

表4 課題 #5 の教案

課題 #5		
Lesson 1-A Core Conversation (Japanese: The Spoken Language, p. 29)		
1. : わかりますか?	: ええ, わかります.	
2. : 今日しますね?	: いいえ, ちがいます. 明日しますよ.	
3. : わかりましたか?	: ええ, わかりました.	
4. : つくりましたね.	: はい, 昨日つくりました.	
5. : できましたか?	: できました, はい.	
Structural Patterns 1, 2, 4 (pp. 31 ~ 34)		
コンテキスト	インストラクターの発話	学生の発話
絵 #1: オフィスの絵, 時計(朝 9時)	: おはようございます.	: おはようございます.
絵 #2: コンピューターの絵, you = technology expert	: わかりますか?	: ええわかります. (Core conversation 1)
絵 #3: タイプのお願い	: わかりますか?	: ええわかります. (Core conversation 1)
絵 #4: タイプの終わった書類	: できましたか?	: できました, はい. (Core conversation 5)
	.	.
	.	.
	.	.

で行うための絵などの順番が示されている(1列目)⁵.

目標とするのは、自然な日本語における言語活動のシミュレーションであり、シミュレーションのなかではインストラクターはオフィスの上司であったり、オフィスの部下であったりする⁶。(そうすることで、例えば学習者が「おはよう」と「おはようございます」の違いなどを、相手を見て使い分けられるか見る。)もちろんその際、発音、その表現の適切な使い方などについてもインストラクターは同時に注意を払い、発音が悪かったりしたならば、その場で矯正して、もう一度そのシミュレーションをやり直すこともある。課題の表現は、いくつかの別のコンテキストで実際に使いこなされているかをテストされる⁷。そして、学習者のパフォーマンスへのコメントを、

⁵ いろいろな表現をいろいろなコンテキストで使えるようにするための会話のシミュレーションでは様々なコンテキストを提示しなければいけないが、特に 101 などではまだ日本語をほとんど知らないの、絵のような視覚的情報に頼ることが多い。それらコンテキスト提示のために使う絵などは教案とともに前もって準備されている。英語ではなく絵でコンテキストを示すことで、シミュレーション中に英語と日本語を混ぜたり、学習者が英語に頼ることをやめさせることができる。

⁶ もちろん、101 などでは学習者の知っている表現も限られていることから、自然な会話のシミュレーションは断片的なものになることが多い。

⁷ 1対1で行われているという点を除いては、実はここで述べられているような学習者のパフォーマンス、シミュレーションを使った教え方はオハイオ州立大学の場合グループ形式の授業でも行っている。

インストラクターはその学習者のファイルに書き込んでいく。セッションの終わりには、簡単な復習、及び総合的評価が伝えられる。(この時点では、コメントがあまりに複雑になるときは英語が使われることもあるが、簡単な復習・評価は学習者も徐々に日本語で理解できるようになる。) 課題が発音、用法、文法などの点においても十分に習得されていると判断されたとき、学習者は次の課題へ進むことを許される。もし準備が足りなかったり、課題が消化されていなくて十分なパフォーマンスが見られない場合は、同じ課題を繰り返し勉強してくるように指導される。

学習者はこのようなセッションを順番に登録した分だけその学期に繰り返し、それぞれのセッションの成績の平均でその学期の最終的な成績をもらうことになる。インストラクターの方とは言うところ、101 から 104 までの 150 にのぼる教案を使って、それぞれの学生の課題にあわせた 15 分のセッションを 1 週間に 10 時間から 12 時間ほど(40 から 48 セッション)教えることとなる。

実際のセッション例を見たところで、次に日本語個人教授プログラムを実際に開始・運営していくための問題点、注意点について考察したい。

6. 日本語個人教授プログラムの実践における問題点・注意点

個人教授プログラムは、その特殊な仕組みからセクション 4. で述べたような様々な目的(グループ形式のコースでは果たすことの難しい目的)を果たすことが可能になると思われるが、また同時にグループ形式のコースでは問題にならないようなことが問題になることもある。このセクションでは、個人教授プログラムを開始し、維持していくにあたって問題となる点、または注意すべき点について述べたいと思う。

6-1. 学生への情報伝達の問題

セクション 3. で述べたように、すべての学生と教師が一同に集まるのは学期の初めに行われるオリエンテーションのみで、オリエンテーション後は学習者は基本的に各々の責任において自習、教師とのセッションを行う。従って、必要な情報をこのオリエンテーション以降、すべての学習者に伝えるのは、グループ形式のコースに比べて大変難しくなる。もちろん、プログラムの責任者はプログラム全体およびプログラムにいる学習者の状態について常に注意を払い、大きな問題などがないかどうか気をつけ、重要な情報はイーメールで連絡するなどの必要があるが、学習者が様々なコース(101~104)、様々な課題を様々な進度で学習し、様々なときにセッションを行う個人教授プログラムでは、学習者一人一人責任を持って行動する必要がある。

オハイオ州立大学の個人教授プログラムでは、各々のコースの課題、また評価基準、プログラムの規則などは細かく決められており、それらはすべてシラバスに明記され、また同じ情報がウェブ・サイトにのっている。また、重複するようでも課題、評価基準、プログラムの規則など

をオリエンテーションで詳しく説明し、学習者がプログラムを始める前にこのプログラムでは何をどうすべきなのかははっきりわかっている必要がある。そして何か問題が生じた場合、教師から連絡がくるのを待つのではなく、学習者の方から教師に連絡しなければならないことをはっきり確認しておいた方がよい。

6-2. 自習中心のプログラム

学習者が一同に集まるのがオリエンテーション以外になく、学習者各々が違うことをしている個人教授プログラムでは、すべての学習者に手取り足取りの講義を行うことは不可能である。(例えば、グループ形式のコースで行われている1コマの文法の講義を個人教授プログラムで20人の学生にバラバラに講義しようとすれば、もちろん20倍の時間がかかる訳で、グループ単位のコースと同じようには当然いかない。)そこで、個人教授プログラムは必然的に自習中心のプログラムとなる。本校の個人教授プログラムでは、学習者は日本語の文法・文化・漢字などを細かく分けられた課題に沿ってセッションに来る前に自習することになっており、教師は与えられた課題が学習者によってきちんとマスターされているかどうかを調べるために、セッション中にそれぞれの課題に基づいた自然な会話のシミュレーション形式のオーラルインタビューを行う。前に述べたように個人教授プログラムはグループ形式のコースに比べ柔軟性もあり、いろいろな利点が考えられるが、同時に学習者側の責任がより重いプログラムであることも否めず、この点は教師だけでなくオリエンテーションなどを通して学習者にもきちんと伝えておく必要がある。

もちろん、学習者の自習が問題なく行われるように様々なサポートのシステムを整える必要もある。例えば、どんな教材を選択するかなどはとても大切な問題で、十分な文法・文化などの説明のある教科書だけでなく、使いやすく学習者が1人でも効果的に実際のコミュニケーションの練習ができるようなテープやCD-ROMなどの教材が必要となる。更に、学習者が自習中にわからないところなどがあったときに、それらを教師に聞くことができるオフィスアワーなどを、プログラムの中に組み入れることも効果的と思われる⁸。

自習にまつわる学生側の重い責任は個人教授プログラムの問題ともなるが、有効な自習の習慣を身につけることができれば、それは長期的に見れば学習者の利益となる。Walker and McGinnis (1995)でも述べられているように、英語を母国語とする日本語の学習者は、日本語を習得するために他のヨーロッパ系の外国語に比べかなり長い年月を要する。従って、大学などの日本語のプログラムを終えた後も、日本語の学習を続ける必要がある訳だが、個人教授プログラムは自己

⁸ 本校では、グループ形式の日本語の授業でも、会話などを使えるところまで勉強、練習してることが期待されている。よって、グループ形式のコースでも自習が大切である点は同じである。しかし、グループ形式の授業で行われている文法の講義などは個人教授プログラムでは自習に任されている。文法の講義のウェブ・サイトは現在開発中である。

学習が大きな比重を占めるため、学生はプログラム在籍中から効果的な自己学習の訓練を受けることができるのである。

6-3. 教師のワークロードと教案

本校個人教授プログラムでは、学習者は教師と1対1で15分のセッションをもち、課題をもとに会話のシミュレーションなどを行い、評価・アドバイスなどをうけるわけだが、これは1人の教師が1時間で4人の学生としかセッションを持ってないことを示す。そこでグループ形式のコースと同じようにある程度の数の学生を1学期中に教えようとするれば、当然教師のコンタクトアワーがグループのコースより長くなる必要がある。

更に、教師は15分で効果的にオーラルインタヴューを行い、その間にどの学習者も平等に評価しなくてはならないから、各々のセッションの教案は細かいところまで準備されていなければならない。しかしながら、学生は皆違う課題を勉強しており、もし教師が1週間に10時間、1回15分のセッションをもつと、合計で1週間に40にも及ぶセッションの教案を必要とすることとなり、同然教師一人一人が毎週のように違う教案を用意していくのは不可能となる。

オハイオ州立大学では、101から104までで150ほどある課題の教案(オーラルインタヴューのスク립ト)はすべて前もって準備されており、教師は各々のセッションでこれらの準備された教案を使ってセッションを行う。もちろん教案を準備するのはそれなりに時間のかかる作業であるが、教案があることで最低限のセッションの質を保つことができるし、何よりも教師側の不必要な負担を取り除くことができる。従って、いかに前もって教案を準備できるかが、個人教授プログラムを円滑に開始、運営してゆくための鍵と言えるだろう。また、グループ形式のコースの教師の仕事の中で大きな比重を占める授業前の準備を大幅に削ることで、個人教授プログラムで必要とされている長いコンタクトアワーを実現することができるわけである。

個人教授プログラムでは、おそらく本稿の最初に上げたような柔軟性の利点とここで述べたような教師の仕事の負担・非効率性という問題をいかにバランスしていくかということが、プログラムを実際に続けていく上で重要なポイントになるように思われる。

6-4. 記 録

本校個人教授プログラムでは、4人から5人の教師が70人程の101から104までの学生とバラバラにセッションを行うが、学生には一人一人ファイルが作られていて、セッションの度に担当の教師が学生とその課題の評価、コメントなどをファイルに書き込んでゆく。その学期の最終評価は1つ1つの課題の評価の平均なので、学生がどこまで課題が終わっているのか、どのような評価を個々の課題で受けているのかなどの記録をきちんと取っておくことは非常に大切である。これらの記録はコンピューターにもいれられているが、定期的に記録をプリントアウトして、記

録が学期の終わりまで間違いなく保存されるよう最大限の注意をすることが必要だ。

6-5. プログラム全体の効率

上でも少し述べたが、グループ形式のコースに比べて個人教授プログラムでは効率性が問題となる。この効率という問題は、教師の仕事の効率だけでなく、プログラム全体の運営の効率という点でも関わってくる。例えば、本校個人教授プログラムの学生は毎週セッションの時間をプログラムと自分のスケジュールに基づいて決めるのだが、時には学生が病気などでセッションをキャンセルしなければならないこともあり、学生が教師と連絡を取らなければならないことも出てくる。1999年冬学期より、オハイオ州立大学は日本語以外の個人教授プログラムも集めて、Central Individual Instruction Center をもうけた。そこには、セッションのためのいくつかの小さい部屋、ファイルなどをしまう部屋、コンピューターラボだけでなく、センター全体の受付、電話をとるスタッフ等がおかれている。スタッフは特定の言語のプログラムにそれほど精通している訳ではないが、学生からの電話に答えたり、セッションのキャンセルなどを処理し、かつセッションのための部屋、ファイルをしまう部屋などの管理を行い、個人教授プログラムに興味のある学生に渡すためのコースのシラバスを保管したりしている。これらは柔軟で学習者個人個人を中心としたプログラムを効果的かつ効率的に運営していくために大きなサポートとなっている。

7. 最 後 に

今日、日本語のプログラムには日本語や日本文学などを専攻とした学生だけでなく、ビジネス、自然科学、エンジニアリングなどの他の専攻をもった学生及び社会人、また留学などを通して様々な日本に関する経験を持った学生があふれている。オハイオ州立大学における個人教授プログラムは、あくまで個人教授の1つの形にすぎないが、学習者を中心に据えた日本語教育の新しい可能性を示しているのではないと思われる。実際、本個人教授プログラムのコース終了率は97%で、途中で学習を断念する学生は非常に少ない。また、日本語個人教授プログラムの101~104は毎学期全く空きがみられない。グループ形式でも日本語の101~104は長年開講されてきたのだが、それらの学生数が個人教授プログラム開始後減少するということなく、年間述べ250名をこす日本語個人教授プログラムの学生数は、全く新たに開拓された学生数である。

最後に、上に述べたように日本語のプログラムは、グループ形式、個人教授プログラムなど、全く違う構造・形態によって様々な長所もあれば、短所も持つことになる。個人教授プログラムはその柔軟性、また学習者を中心に据えるといった考え方から、学生には大変な人気であるが、グループ形式では存在しないような困難や問題が存在することも事実である。従って、教師は違う

プログラムの利点や問題点をよく理解し，そのプログラムのよさが最大限に生かされるように，そして，問題への対応を十分に考えながら，プログラムのデザイン・運営をしてゆく必要があると考える．

参 考 文 献

- Lange, D. 1972. *Individuation of Instruction*. Skokie, Illinois: National Textbook Company.
- Strasheim, L. A. 1972. A rationale for the individuation and personalization of foreign language instruction. In *Individuation of Instruction*. ed. Dale Lange. Skokie, Illinois: National Textbook Company.
- Walker, G. & S. McGinnis. 1995. *Pathways to Advanced Skills*. Columbus, Ohio: Foreign Language Publications.